山陰総合

身近なニュースは
本社編集局　TEL0852(32)3320

再生医療でベンチャー設立

鳥取大大学院・汐田教授ら学内に

重症肝疾患 治療シート実用化

バイオベンチャー企業について説明する汐田剛史教授
＝米子市西町、鳥取大大学院医学系研究科

鳥取大大学院医学系研究科遺伝子医療学部門（米子市西町）の汐田剛史教授らが「肝疾患治療用細胞シート」の実用化に向け、バイオベンチャー企業「カノンキュア」を学内に設立した。

シートは間葉系幹細胞から作り、マウスを使った実験で肝機能の改善効果を確認済み。重症肝疾患患者が肝移植を待つ間に症状を改善させる治療として期待され、今後、臨床研究などを経て、7、8年後の実用化を目指す。

実用化には、厚生労働省の審査など法律や制度に詳しい人材が必要。専門スタッフを雇って研究に専念できる環境を整えれば、より早い市場投入が可能と判断し、4月25日に会社を設立した。飲むことで、肝臓内の間葉系幹細胞を肝細胞の機能を持つ細胞へと分化させ、肝機能を改善できる薬品の開発も計画している。

劇症肝炎など重症肝疾患患者の治療は、肝移植が最も有効とされる。国内で肝移植が必要な患者が年間2500人に上る一方、臓器提供者（ドナー）が少なく、移植例は年間500人にとどまっている。

このため汐田教授が代表を務める研究グループは、骨髄やさい帯血にあり、骨や筋肉などの細胞に分化する能力がある間葉系幹細胞に着目。間葉系幹細胞に肝細胞へ分化を促す化合物を加えて培養し、肝機能を持つ間葉系幹細胞のシートを作成。肝障害があるマウスの肝臓に移植し、肝機能の改善効果を確認していた。

汐田教授は「肝疾患患者の多い高齢者でも体への負担が軽い治療法となる。実用化を目指し、早急に研究を進めていく」と話した。

（狩野樹理）